

2018年5月13日（日）「エリヤとは誰か」

マタイ 17:9-13

9 彼らが山を降りるとき、イエスは彼らに、「人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見た幻をだれにも話してはならない」と命じられた。10 そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った。「すると、律法学者たちが、まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。」11 イエスは答えて言われた。「エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。12 しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。」13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと気づいた。

#### 【序論】

私は講壇に立つ時、これから自分が語ることが会衆の皆様本当に伝わるだろうかという不安を覚える時があります。特に、新来会者の方がいらっしゃる時、自分が準備してきた説教をそのまま語ってよいか、迷うものです。聖書に親しんできますと、福音の内容も、その独特な用語も、自分にとってはいつしか当たり前になってしまう。しかし、初めてこれを聞く人にとってはそうではありません。人によっては、まるで外国語のように聞こえるかも知れないのです。未信者の親戚が礼拝に出席することがありますが、私はそのような時には一ヶ月以上前から準備を始め、できる限り噛み砕いて語れるように心がけています。ところが、礼拝後に感想を聞きますと、「一生懸命聞いてたけどよう分からなかった」という答えが返ってきて、嗚呼…と落ち込むのです。

福音が伝わらない理由をあれこれ考えてみまして、私は四つの前提を立てるようになりました。第一に、語っている内容が実は福音ではなかったということがある。説教者自身が福音を分かっていないということがあるのです。これは最も根本的な問題でしょう。第二に、福音を語ってはいるけれど、聞き手に配慮していないということがありません。説教者が聴衆の顔ぶれを無視して語ったならば、ある場所では伝わる内容が、別の場所では伝わらないということが起きてきます。第三に、説教そのものはよく整えられていても、聞く側の心が整えられていないということがありません。心が思い煩いで満ちていると、御言葉を聞くのが困難になる。第四に、聞く人にとって福音の内容が意味不明であることがあります。「十字架の福音」が世の常識からかけ離れているため、そのような現象は起こり得ます。

説教者の責任としては、第一と第二は避けたいものです。そして、第三と第四を回避できるように、会衆のために祈って臨む必要があります。実際、福音は誰にでもすんなりと理解できるものではないのかも知れません。パウロも言っています。

**それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。（I コリント 1:21b）**

これは誤解され易い聖句ですが、ここで言われていることは、「宣教のことば」そのものが愚かだという意味ではなく、「宣教のことば」（福音の内容）が世の人には愚かに聞こえるという意味です。それほど、十字架の福音というのは世の常識に反する。幸せになるために宗教を持つのに、なぜ十字架という重荷を負わなくてはならないのか。私たちは今一度立ち止まり、自分が信じている事柄に思いを馳せてみる必要があるでしょう。

## 【本論】

今日は、山上の変貌の後、主イエスと三人の弟子が下山する場面です。ここで短くも意味深長なやりとりがなされる。

### 本論 1. 沈黙要求の理由

**彼らが山を降りるとき、イエスは彼らに、「人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見た幻をだれにも話してはならない」と命じられた。（17:9）**

主イエスはなぜ弟子たちに沈黙をお命じになったのでしょうか。恐らく、放っておけば、三人は自分たちが山上で見た出来事をふれ回ることになるでしょう。主イエスが栄光に輝いたこと、モーセとエリヤが現れたこと。この事態を目撃した三人は、主イエスが紛れもないメシヤであることを確信しました。しかし、他の九人の弟子たちに（たとえ善意からであったとしても）話してしまうと、次のような問題が生じてくるでしょう。第一に、弟子たちの間で妬む者が出てくるということです。特権にあずかった三人との間に亀裂が生じる危険性がありました。第二に、その話を聞いた弟子たちが民衆に言い広める可能性があります。すると、民衆は熱狂し、再びイエスを政治的な王に仕立て上げようとするかも知れません。主イエスの本来の使命とはかけ離れた運動が始まっていくと思われます。山上の変貌を目撃した弟子たち自身が、その出来事の意味を理解していなかったのですから、現時点で言い広めることは危険でした。主イエスがモーセとエリヤと話しておられた「エルサレムでの受難」の意味は未だ隠されていたのです。

主イエスはここで「人の子が死人の中からよみがえるときまでは」と、沈黙に期限を設

けておられます。永遠に黙っておれとは言っておられない。なぜか。それは、主イエスが人々から捨てられ、「メシヤの死」が実現したならば、もはや反乱を導く人物として祀り上げられる危険性はなくなるからです。主が十字架の使命を全うし、復活した暁には、今度は「イエスとは何者であるのか」が証しされていかななくてはならない。主は在世中に人間的栄光を受けることを徹底して避け給うたのです。

## 本論 2. 律法学者の解釈

**そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った。「すると、律法学者たちが、まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。」(17:10)**

弟子たちがここで律法学者の見解を引用して主イエスに問いかけているのは興味深いことです。このことは、律法学者の聖書解釈が民衆の常識となっており、弟子たちの考え方にも深い影響を与えていたことを言い表しています。律法学者は、メシヤの前にエリヤが来ると教えていました。その教えの背後にはマラキ 4:5-6 があります。

**見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。**

エリヤとは、列王記に登場するヤハウエなる神の預言者であり、たった一人でバアルの預言者 450 人、アシェラの預言者 400 人と戦った英雄です (I 列王 18 章)。イスラエルがバアル崇拝に傾倒するのに断固として反対しました。彼は死せずして天に挙げられたことから (II 列王 2 章)、世の終わりにもう一度現れると信じられていたのでしょう。

さて、預言者マラキが言っているように、世の終わりが来る前にエリヤが現れるという律法学者の主張は、解釈として間違っていないと思われます。ただ、そのエリヤなる人物がどのようにして現れるかは不明でした。人々がこのエリヤの到来を心待ちにしていたのは確かです。そして、明確にエリヤだと分かる人が来なければ、メシヤは現れないと信じられていたのです。

だから、弟子たちの中には混乱があった。主イエスがメシヤであるならば、エリヤの出現を待たずして来てしまったということなのか。エリヤが来て、神の義が取り戻されると約束されているのに、未だ悪が蔓延しているのはなぜか。いや、我々は確かに山上でエリヤを目撃したのだから、そのことをなぜ黙っていなくてはならないのか。むしろ、時が来ていることを人々に知らせるべきではないのか。そのような疑問が弟子たちの心に渦巻いていたのです。

### 本論3. 主イエスの解釈

イエスは答えて言われた。「エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。」そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと気づいた。(17:11-13)

主イエスは律法学者の言っていることを否定はせず、彼らの解釈に則って弟子たちに教えていかれます。律法学者が言っているように、確かにエリヤが先に来て、メシヤの道備えをする。人々はまだだと言っているが、エリヤは既に来たのだと。では、そのエリヤとは誰のことか。主は暗にバプテスマのヨハネのことを言っておられるようです。

バプテスマのヨハネはどのような人生を送ったのでしょうか。彼について、生まれる前から次のように予告されていました。

あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ、そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせます。彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。

(ルカ1:13b-17)

ヨハネはこのような御使いの宣言の下に生まれ、エリヤ的預言者として歩み始めました。そして、ヨルダン川で多くの人にバプテスマを授けました。注目すべきことに、このヨハネが何者であるかを調べていた人々との間に、次のようなやりとりがあるのです。

ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。彼は告白して否まず、「私はキリストではありません」と言明した。また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」(ヨハネ1:19-23)

ここでは、ヨハネが自分をエリヤではないと明言しています。彼自身、自分が「来たるべきエリヤ」ではないという認識をしているのです。ところが、主イエスの見方は違い

ました。ヨハネこそエリヤであると。ここには主イエス特有の聖書の読み方があります。主イエスの念頭には、一貫して「受難」という目的がある。人々が想像もできないことであるが、メシヤは苦しみ、殺されるために来る。それゆえに、先立つ「エリヤ」もまた受難に遭う。受難を通してメシヤの道備えをするのだと。主イエスのメシヤ観は、イザヤ 53 章の「苦難のしもべ」に基づいています。

彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

(イザヤ 53:2-5)

ヨハネは正しい裁判を受けることもなく、ヘロデの手によって殺害されました。彼がその人生でやってきたことすべてが地に埋められるかのごとく、栄光が闇に葬り去られたのです。主イエスはそれと同じように、いえ、もっと残忍な方法で、人間の憎悪と嘲りの中で十字架に架けられて殺される。つまり主は、ヨハネが「受難のメシヤ」の先がけとして、確かにエリヤの役割を果たしたと解釈したのです。

主イエスの聖書解釈は、当時のほとんどの人に到底受け入れられるものではありませんでした。人々は「殺されるメシヤ」など信じなかったのです。その証拠に、主イエスが捕えられた時、人々はこぞって「十字架につけろ」と叫んだではありませんか。

## 【結論】

私たちが信じる福音は、このように人々から捨てられ、抹殺されたイエスを救い主と認めることなのです。そして、この方の死によって、私たちの罪も共に滅びたと告白する。「十字架の福音」とは、斯くも不可解な真理と言えるでしょう。しかし、聖書全体を注意深く読んでみるならば、その内容は何と一貫していることか。主イエスの贖いの死は、人間が罪を犯した直後に暗示されているのです(創世記 3:15,21)。私たちが信じていることは、この世の常識とは相入れません。それゆえに、簡単には理解されないかも知れない。しかし、それでも私たちは大胆に証しするのです。主イエスの死によって、私たちの罪もまた滅びたと。そして、私たちが主イエスと同じ苦難にあずかり、十字架を負って生きていく。これがキリスト者の「不可解な」喜びであります。

## 【祈り】

御子イエスの苦しみを通して、私たちが罪より贖ってくださった天の父なる神様。福音のメッセージは聖霊によってしか理解されることはありません。人が福音を受け入れるためには、聖霊の介入が不可欠です。私たちが宣べ伝える「十字架の福音」は、世の人々には愚かに聞こえるかも知れません。しかし、それでも語り続ける勇気と知恵をお与えください。祈り深く、聞く人の目線に合わせ、丁寧にイエス・キリストを宣べ伝えていくことができますように。そして、私たちの生き方を通してこそ、神の愛を証しさせてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の言葉によって、ご自身の救いの真理を示し給うた、父なる神の愛。

ヨハネの受難を先がけとし、十字架の苦しみを通して、我らを罪より贖い給うた、主イエス・キリストの恵み。

「宣教の言葉の愚かさ」を通して、世に福音を広め給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。